

障害のある人の 社会参加について考える

～文化芸術をきっかけに関わりあう～



令和5年度滋賀県地域ケアサービス推進事業報告書

障害のある人の 社会参加について考える

～文化芸術をきっかけに関わりあう～

はじめに

昨今、障害のある人への福祉サービスは充実し、様々な障害についての認知度も向上してきました。しかし、福祉制度のはざまに置かれている人や、その特性への理解が進んでいないことから福祉サービスが届きにくく、安心して充実した地域生活を送ることが難しい状況にある人も少なくありません。また、制度上は様々なサービスを利用できる一方で、充実した社会参加が叶わない人もいます。

その人たちを取り巻くニーズとは何か、どのような支援が必要とされているのか。社会福祉法人グロー（GLOW）が行う、地域ケアサービス推進事業（滋賀県補助事業）は障害特性による生きづらさやニーズに応じた支援のあり方を探り、モデル的な実践を行ってきました。

今年度は、美術鑑賞や食をテーマとしたワークショップをきっかけに、盲ろう者のアクセシビリティ（社会参加のしやすさ）という視点で支援のあり方について研究しました。昨年度に引き続き、障害当事者、支援者、学生、講師らと協力して企画を考え、地域の資源を活用し、ワークショップを実施しました。これまで芸術鑑賞会等で取り組んできた工夫や合理的配慮を様々な場面に広めるとともに、質の高い社会参加の実現に着目しました。障害のある人が地域において主体的に参加できる活動の幅が広がり、その質が保障されるように、アクセシビリティの向上を図る試みです。

また、同事業では、現代において糸賀一雄氏の思想に通底する実践を行っている人の考えや活動を「SHIGA-FUKU」というウェブサイト^{シガフク}で発信しています。障害福祉領域だけでなく、共生社会の実現につながる様々な取り組みについて、幅広く活躍する実践者を取材しました。併せて、福祉現場で働く人等のネットワークづくりの場として、過去に取材した方々を招いたトークイベントを開催しました。「制度のはざま」に向き合い、活動している実践者へのインタビューに加え、本イベントのレポートを併せて掲載しています。

誰もが安心してその人らしい生活を送ることができる共生社会づくりに向けて、制度のはざまにある人とともに文化芸術をはじめとする様々な活動を楽しむことにより、地域において相互理解が深まることを期待します。

2024年3月

社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～

法人事務局地域共生部 地域共生課

令和5年度滋賀県地域ケアサービス推進事業報告書 目次

はじめに

第1章 地域ケアサービス推進事業について

(1)事業目的	4
(2)研究課題	4
(3)実施内容	5
(4)本書における「アクセシビリティ」について	5

第2章 「NPO法人しが盲ろう者友の会」と学生とともに作るワークショップ

(1)目的	6
(2)実施概要	7
(3)ワークショップができるまで	8
(4)フォーラム・振り返り	15
(5)考察	17

第3章 コーヒーを楽しむワークショップ

(1)目的	19
(2)実施概要	20
(3)ワークショップの流れ	20
(4)アンケート結果	23
(5)考察	24

ウェブサイト「SHIGA-FUKU」について 26

インタビュー 中田美穂さん(陶中田美穂) 27

インタビュー 富田賢二さん(特定非営利活動法人IL 逢坂福祉会 代表) 31

「シガフクカレッジ」レポート 35

まとめ 39

第1章

地域ケアサービス推進事業について

(1) 事業目的

誰一人取り残さない共生社会づくりに向けて、制度のはざまにある障害のある人たちのアクセシビリティ(社会参加のしやすさ)という視点で支援のあり方について研究し、合理的配慮の進展とアクセシビリティの向上につなげていくことを目的とします。

(2) 研究課題

障害のある人が安心して充実した地域生活を送れることを目的に、障害のある人のアクセシビリティの拡充を「参加する活動を選択できること」と捉え、文化芸術活動を切り口に研究しました。

研究課題として着目したのは「制度のはざま」に置かれている盲ろう者のアクセシビリティ

です。

「制度のはざま」とは、1つは「支援の届きにくさ」を意味します。「盲ろう」という障害特性への理解が進んでいないことから、地域でその存在や生きづらさが可視化されないまま、十分なサポートを受けることなく、地域での様々な経験から遠ざかっている人たちがいます。コミュニケーションや移動に困難さがあったり、自ら情報を入手しにくい環境にあたりすると、幅広い活動を楽しむことは叶いません。本来の意味で、「選択できる」状況を作るためには、参加しやすい活動が地域に増え、興味や関心を持つきっかけとなる経験を積み重ねられることが重要だと考えます。

もう1つの「制度のはざま」は、「社会参加の質が保障されないこと」です。文化芸術を鑑賞するための情報保障やサービスの提供は、国の「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」に明記されており、制度上は様々なサービスを利用することができ、合理的配慮

も普及しつつあります。しかし、制度の範囲内で保障された支援にアクセスできたとしても、それだけで「本当に充実した社会参加」につながるとは限りません。また、制度上、十分な支援を受けにくい状況にある盲ろう者は、とりわけ社会参加の質が保障されにくい立場に置かれていると言えます。

例えば、盲ろう者と美術作品を鑑賞するとき、情報入手の手段として作品に触れることや、通訳介助者が通訳しやすいように短くわかりやすい表現を使った解説がある等、必要なサポートが用意されていることは重要です。さらに、一緒に企画を考えたり、様々な人たちと交流を重ねたりすることが、それぞれの方法で作品を味わうことができる充実した鑑賞につながるといえます。それは制度として定型化できるものではなく、作品の特徴や関わる人たちによっても内容は変化します。制度の整備が進むと同時に、参加する活動の質が向上することもアクセシビリティの拡充に欠かせない要因です。

上記を踏まえ、制度のはざまにある盲ろう者が、参加する活動を選択できる社会をつくるという視点に立ち、実践を行い、その成果を考察しました。

(3) 実施内容

今年度は盲ろう者のアクセシビリティに着目し、文化芸術をきっかけに2つの企画を行いました。

1つは、盲ろう者、支援者、学生らとともに美術鑑賞を楽しむワークショップを組み立てるという企画です。盲ろう者と学生と一緒に作品を鑑賞し、その体験をもとに盲ろう者、学生が講師となり、一般参加者を対象としたワークショッ

プを作りました。

もう1つは、コーヒーを楽しむワークショップです。地域のお店から講師を招き、講師や会場のカフェと連携して内容を検討し、盲ろう者、通訳介助者等が参加してコーヒーのハンドドリップ体験ができるワークショップを実施しました。

(4) 本書における「アクセシビリティ」について

アクセシビリティとは、高齢者や障害者等も含めたあらゆる人の、情報やサービスへのアクセスのしやすさという意味で使われるのが一般的です。しかし、本書においては、「令和5年度障害者地域生活移行促進事業 地域ケアサービス推進事業」の要綱にならい、「障害のある人の社会参加のしやすさ」という意味で使っています。

第2章

「NPO 法人しが盲ろう者友の会」 と学生とともに作る ワークショップ

(1) 目的

盲ろう者(※1)のアクセシビリティの向上を目的に、「文化芸術を楽しむ」ということに着目し、「NPO 法人しが盲ろう者友の会」と学生とともに、美術鑑賞を楽しむワークショップを行いました(※2)。NPO 法人しが盲ろう者友の会から盲ろう者2名、事務局員2名、また芸術大学の学生2名に検討委員として参加していただきました。盲ろう者の検討委員が選んだ作品を学生の検討委員と一緒に鑑賞し、その体験をもとに、盲ろう者、学生が講師となり、一般参加者を対象としたワークショップを企画し、実施しました。

※1 目(視覚)と耳(聴覚)の両方に障害があることを「盲ろう」と言います。見え方や聞こえ方の程度は、全盲ろう(全く見えなくて、全く聞こえない)から弱視難聴(少し見えて、少し聞こえる)まで様々です。コミュニケーション手段は、触手話、指点字、点字、手のひら書き、音声、筆記等があります。

※2 この事業は、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAを中心に、様々な立場の人たちと文化的な活動をともにするプロジェクト「ケアしあうミュージアム」の一環として行われたものです。

主催: ケアしあうミュージアム事業実行委員会
協力: NPO 法人しが盲ろう者友の会
助成: 令和5年度 文化庁 Innovate MUSEUM 事業

検討委員

岡田昌也(NPO 法人しが盲ろう者友の会理事長)

岡本克司(NPO 法人しが盲ろう者友の会副理事長)

野中美智子(NPO 法人しが盲ろう者友の会事務局員)

萩原さつき(NPO 法人しが盲ろう者友の会事務局員)

緒方里奈(成安造形大学学生)

山本桜(成安造形大学学生)

(2)実施概要

作品選定

日 時:4月28日(金)10:00~15:00
会 場:KURUN HALL(クルンホール)・KURUN ラウンジ(岡山県岡山市)
出席者:15人(しが盲ろう者友の会12人(うち盲ろう者2人、通訳介助者10人)、事務局3人)
内 容:『ユニバーサル・ミュージアムーさわる!“触”の大博覧会』岡山
巡回展2023」の見学と作品選定

検討会議①

日 時:7月24日(月)13:30~15:00
会 場:能登川コミュニティセンター 学習室2(東近江市)
出席者:10人(しが盲ろう者友の会8人(うち盲ろう者2人、事務局員2人、通訳介助者4人)、
事務局2人)
内 容:事業説明および鑑賞会の内容の検討

鑑賞会

日 時:8月29日(火)13:00~15:00
会 場:食堂ヤポネシア(近江八幡市)
出席者:15人(しが盲ろう者友の会8人(うち盲ろう者2人、事務局員2人、通訳介助者4人)、
学生2人、作家1人、事務局4人)
内 容:盲ろう、学生の検討委員による作品鑑賞

検討会議②

日 時:10月23日(月)16:00~17:30
会 場:キラリエ草津 301会議室(草津市)
出席者:11人(しが盲ろう者友の会8人(うち盲ろう者2人、事務局員2人、通訳介助者4人)、
学生1人、事務局2人)
内 容:ワークショップの内容の検討

ワークショップ

日 時:11月26日(日)13:00~15:00
会 場:まちや倶楽部 麴室(近江八幡市)
講 師:岡田昌也、岡本克司、緒方里奈、山本桜
参加者:一般参加者4人 しが盲ろう者友の会6人(うち事務局員2人、通訳介助者4人)
内 容:一般参加者を対象とした作品鑑賞・制作ワークショップ

フォーラム・振り返り

日 時:2月2日(金)15:00~16:00
会 場:草津市立市民交流プラザ 小会議室1(草津市)
出演者:岡田昌也、岡本克司、野中美智子、山本桜(聞き手:社会福祉法人グロー石田瞳)
内 容:ワークショップとその開催までの取り組みについての振り返り
公開方法:Web配信

(3) ワークショップができるまで

作品選定

NPO法人しが盲ろう者友の会の検討委員とともに、岡山県で開催された『ユニバーサル・ミュージアムーさわる!“触”の大博覧会』岡山巡回展2023』を見学に行きました。同展は、すべての作品をさわって鑑賞する展覧会であり、その出展作品の中からワークショップで鑑賞する作品を盲ろう者の検討委員に選んでいただきました。

会場は、OHK岡山放送オフィス内の特設ミュージアムスペース。25作家、約170点の作品が展示されていました。まずは展覧会をじっくり体験し、すべての作品を鑑賞した後、検討委員の岡田さん、岡本さんにそれぞれ作品を2

点ずつ選んでいただきました。

岡田さんは、《不屈のひと(大関魁皇頭像)》(片山博詞、2014)という大関魁皇の頭部のブロンズ像と、《Love Stone Project》(富長敦也、2017)というハート形に磨かれた石の作品を、岡本さんは、《玉送り》(わらべ館、1995 制作:若林孝典)という木のおもちゃと、《思考する手から感じる手へ、そして…》(宮本ルリ子、2020)という箱の中に手を入れて、指文字などからメッセージを読み解く作品を選ばれました。



検討会議①

岡山巡回展で選定した作品を学生の検討委員と一緒に鑑賞する鑑賞会について、NPO法人しが盲ろう者友の会の検討委員に出席していただき、1回目の検討会議を実施しました。目的は、検討委員と事務局が意見交換し、鑑賞会で学生とどのように作品を鑑賞してみたいか話し合い、内容を詰めていくことです。「学生はいきなり作品を見てさわるのではなく、アイマスクをつけて視覚情報がない状態で、盲ろう者と同じ立場になって鑑賞するのはどうか」「聴覚情報も同じで、鑑賞するときは対等であってほしい

ため、最初の5分間はだれも話さないで静かに鑑賞するのはどうか」等の意見が出され、これらをもとに鑑賞会を企画しました。



片山博詞《不屈のひと(大関魁皇頭像)》2014



富長敦也《Love Stone Project》2017



わらべ館《玉送り》1995 制作:若林孝典



宮本ルリ子《思考する手から感じる手へ、そして…》2020

鑑賞会

盲ろう者の検討委員である岡田さん、岡本さんと、学生の検討委員である緒方さん、山本さんの初顔合わせとなった鑑賞会では、最初に、一緒に作品を鑑賞するペアで自己紹介とアイスブレイクをしました。岡田さんは触手話により、岡本さんは音声によりコミュニケーションを取られます。岡田さんと緒方さん、岡本さんと山本さんのペアに分かれ、通訳介助者を介して話しながら緊張をほぐしました。

次に、岡田さん、岡本さんがそれぞれ選んだ作品2点をペアで鑑賞しました。学生の緒方さん、山本さんはまずアイマスクを着用し、見えない静かな状態で作品をさわった後、岡田さん、

岡本さんと対話しながらさわり、最後にアイマスクを外して見える状態で鑑賞しました。鑑賞会には、岡田さんが選んだ作品《不屈のひと(大関魁皇頭像)》を制作した作家の片山博詞さんも参加してくださり、岡田さん、緒方さんと一緒に鑑賞されました。最後に全体で感想をシェアし、作品をさわったときの印象や、鑑賞してみたかったことを共有しました。



音声記録

鑑賞した作品は、本事業と同時期に開催されたボーダレス・アートミュージアムNO-MA企画展「触の祭典『ユニバーサル・ミュージアムさわる！めぐる物語』」に出展されました。展覧

会の会場に、この鑑賞会の対話の音声記録を展示し、来場者はそれを自由に聴くことができるようにしました。

ここでは音声記録の一部を紹介します。

岡田さんと緒方さん(ファシリテーター:山邊まみ[社会福祉法人グロー])

《Love Stone Project》2017/富長敦也

緒方:私から見て右側にへこみがあって面白いですね。ここが尖っているのが桜の形みたいで面白くなって。

石ってゆるやかに丸いイメージがあるんですけど、ちょっとここ、四角を綺麗に削ったみたいで、厚みがありますね。

岡田:そうですね。僕も最初にみた時は、「ん？石？」と思ったんです。あまりにもきれいでつやつやしていたので「石とはちがうのかな？」と思ったんです。

(アイマスクを外す)

緒方:こっち側が高いんですね。こう斜面のよ
うな感じで。

うねっているのはわかったんですけど、高さの違いはわからなかったです。

岡田:僕も最初は高くて平らだと思っていたんですが、さわっていったら斜めになっていて、ここが高いというのがわかりました。桜の形といわれてみればそうですね。僕はハートなのかなと思いました。



《不屈のひと(大関魁皇頭像)》2014/片山博詞

岡田:僕がこれを選んだ理由は、他の作品は木で作ってあったんですね。でもこれは銅で作ってあって、珍しいなと思ったんです。お侍さんじゃなくてお相撲さんだという

ことを話してもらえて、なるほどなあと思いました。最初は武士みたいだなあと思っていました。

緒方:確かにそうですね。あと、こうやってちょっと叩いたときに音がなるのはすごい楽しいなと思いました。ゴンゴンゴンって鳴り

ますよね。素材は、あんまり知識がないので金属ということしかわからないですね。

岡田:私も最初さわった時には素材は何かなと思ったんですけど、叩いてみて「銅なのかな?」「どうやって作ったんだろう?」と思いました。聞こえないからこういう感じで手を置いて叩くと
(作品に片手を置いて反対の手で作品を叩く。コンコンと音が鳴る。)
響きがこっちの手に伝わってきます。作品を選んだ時期が4月の最後で暑かった

んですけど、さわってみるとひんやりして冷たいなと思いました。

緒方:確かに冷たい。



岡本さんと山本さん(ファシリテーター:石田瞳・白井文佳[社会福祉法人グロー])

《玉送り》1995/わらべ館 制作:若林孝典

山本:素材は木だと思います。手触りが良くて温かい感じがしました。見えないので動いているところを手で追っていくような形で鑑賞をしました。

石田:今、お聞きしたような印象を岡本さんも岡山県で作品を鑑賞したときに感じられましたか?

岡本:子どもの頃に遊んだおもちゃのような記憶がよみがえってくる空気を感じました。今、さわっていてもその気持ちは変わらないですね。

僕らの時は、木のおもちゃが多かったような気がします。うちの父がサラリーマンでしたけど、日曜大工をしてたんです。だから木を使ったおもちゃを作ってくれたことが多かったの、そういう環境が

ヒントをくれたのかなと思います。

山本:小さいころに木で作られたワニのおもちゃがあって、この作品と構造が似ていました。細く組まれた木が何本も連なって、縄で結ばれていて、クネクネと曲がるようなおもちゃでそれがすごく好きだったことを思い出しました。

岡本:ワニですか?

山本:そうなんです。見た目はかわいらしいんです。



《思考する手から感じる手へ、そして…》2020/
宮本ルリ子

岡本:「手」ですよ。これは僕が選んだ作品です。改めてみても、手は手なんですけど一つ一つが指文字になっていて言葉になっているわけですよ。

山本:なるほど。

岡本:だから感想ではなく、説明になってしまうわけですけど……この作品の並べる順番、間違っていないですか？

白井:番号順に並べたので大丈夫だと思います。右から1～6まで順番に並べてあります。

山本:この左から3番目にある形で人差し指にぶつぶつがありますが、これは何ですか？
点字？

岡本:すべての手の人差し指にぶつぶつがあります。

山本:でも5番目の手にはないですよ。

岡本:ほんまや！

これ点字！？こんなところに点字！？
え？じゃあこれは点字がないの？

白井:すべてにあるわけではないかもしれませんがね。



検討会議②

一般参加者向けの美術鑑賞ワークショップについて、検討委員と事務局で話し合い、鑑賞会の体験をもとに内容を検討しました。鑑賞する作品は、時間配分を考え、岡田さんにはハート形に磨かれた石《Love Stone Project》、岡本さんには木のおもちゃ《玉送り》の1点に絞っていただきました。

盲ろう者、学生の検討委員からは、「粘土を使った創作がしたい」「見えない状態で鑑賞した作品をモールでかたどって作品を作ってみたら

おもしろいのではないか」という意見が出ました。ワークショップでは、鑑賞会のとくと同じように一般参加者はまず見えない状態で作品をさわり、対話して鑑賞するという体験を楽しんでもらうだけでなく、作品制作もすることにしました。また、NPO法人しが盲ろう者友の会事務局員の検討委員からは、盲ろう者やアイマスクをした一般参加者が安全に移動できるように安全性を考慮してほしいとの指摘がありました。

ワークショップ

岡田さん、岡本さん、緒方さん、山本さんが講師となり、一般参加者向けに作品鑑賞と制作を楽しむワークショップを開催しました。4人の参加者はまず2つのグループに分かれ、交代で岡田さんと緒方さん、岡本さんと山本さんのペアと一緒に作品をさわり、対話しながら鑑賞しました。作品は黒いシートで覆い、シートの中に手を入れて見えない状態でさわるという形を取りました。参加者の中には口頭でのコミュニケーションが難しい方もいることが想定されたため、アイマスクを使用するのではなく作品を覆うことで、作品をさわりながらスマートフォン等を使って対話できるようにしました。

後半では、さわった作品からイメージしたものを粘土とモールを使ってそれぞれが形にし、お互いが制作した作品を鑑賞しました。ある参加者はハートの形から連想された情景を、また別の参加者は作品そのものの形を表現し、コンセプトを説明し合いながら交流を楽しんでいる様子でした。最後に、黒いシートで覆われていた作品を見える状態で鑑賞し、ワークショップの感想をシェアしました。



(4) フォーラム・振り返り

今年度の事業の振り返りとしてフォーラムを開催しました。4人の検討委員に出演していただき、ワークショップやその開催までの取り組みについて感想や意見をお聞きしました。

岡田さんは、これまでの美術鑑賞の取り組みでは事務局が選んだ作品を鑑賞していたのに対し、今回は盲ろう者の検討委員に鑑賞する作品を選んでいただいたことについて、「絵の場合、薄いものをさわったという感触でわかりにくい。今回は盲ろう者がはっきりわかるように工夫をされたものを選ぶことができたと思う」と振り返りました。

鑑賞会やワークショップについて、岡田さんは、「一般のお客さんも一緒に会って、いろいろ意見交換できたことが良かった」、また岡本さんは、「今回は、いろんな方々の意見を聴くことができたので、自分の芸術に対する見方が変わった。芸術は、見る人、考える人、触れる人によってそれぞれ違っていく」と述べられました。

山本さんからは、「1つの作品から今までの感情や思い出を共有することができたのがすごく

印象に残っている」という感想をいただきました。また、普段は写真を媒体に制作をされていて、「作品を盲ろう者の方にどういふに伝えたいのかということのを少し考えるきっかけになった。写真を撮るという行為も、もっとみんなが楽しめるようなものにするにはどのようなことができるのかということを考えさせられた」と自身の制作について話されていました。

NPO法人しが盲ろう者友の会事務局員の野中さんは、これまでの取り組みも含めて振り返り、「今までは(盲ろう者の)一方的な意見や思いを来ていただいた方に知ってもらおうというような感じだったが、今回はいろんな人の意見や思いがそこに上乘せになって、みんなと会話することによって、盲ろう者と学生さんとの間でまた違った作品が一つできたように思う」と語られました。

フォーラムの映像は、ボーダレス・アートミュージアムNO-MA YouTubeチャンネルからご覧いただけます。



検討委員の声

「滋賀だけでなく、大学生は全国にいらっしやいます。盲ろう者との交流は少ないと思います。啓発活動にもつながると思います」(岡田さん)

「学生さんや一般の方の意見を聞くことで、作品に対して自分の未知の世界を知ることができました。これが芸術なのですね。普段の日常生活でも、一人で考えたり、悩んだりせずに、周囲の人たちの話をしっかり聞けば、また新たな自分が発見できるかもしれません」(岡本さん)

「盲ろう者と作品を触りながら意見交換をすることはその時間、場を共有することで、元々の作品から新しい作品を作り出すことになったのではないかと感じました」(野中さん)

「盲ろう者さんは学生さんや一般の方と交流できる機会がなかなかもてない中での今回の企画

は喜んでおられた。選ばれた2人だけでなく、多くの盲ろう者さんが参加できればもっと良かったと思う」(萩原さん)

「普段盲ろう者の方々とは出会う機会がないので盲ろうの方がどのようにコミュニケーションを取られているのか、作品を楽しまれているのかとても勉強になりました」(緒方さん)

「見えていない状態で鑑賞することで想像がすごく膨らんで、意見が交流できて良かったと思います」(山本さん)

ワークショップ参加者の声

「ほかの参加者と想像して話しながら鑑賞するのは楽しかったです」

「とてもあたたかな雰囲気の中で、楽しく作品鑑賞を行うことができました」



(5) 考察

ワークショップを企画し開催することを通じて、盲ろう者や学生、一般参加者との間で多くの交流が生まれ、豊かな作品鑑賞につながりました。

作品選定では、NPO法人しが盲ろう者友の会の検討委員とともに岡山県で開催された展覧会を見学に行きました。盲ろう者にとって体験する機会が少ない県外への外出や、全国的にも珍しい、すべての作品をさわって体験する展覧会の鑑賞等、質の高い社会参加を目指すうえで意義深い取り組みになりました。また、盲ろう者が鑑賞したい作品を選ぶということは、「盲ろう者がはっきりわかるように工夫をされたものを選ぶことができたと思う」という岡田さんの言葉にあるように、盲ろう者自らの方法で芸術を楽しむことを可能にしたと考えます。ワークショップの内容を検討する中、検討会議では盲ろう者、支援者、学生が出席し、活発な議論がなされ、それぞれの立場から意見交換することができました。岡本さんからは、過去の鑑賞会で体験した粘土細工をもう一度してみたいという意見が出され、これまで行ってきた取り組みが蓄積され、盲ろう者自身の発言で芸術を楽しむ機会を作ることができたことは、大きな成果だと言えるでしょう。鑑賞会では盲ろう者と学生が、ワークショップでは一般参加者も加わり、作品をさわって、交流しながら作品鑑賞を楽しみました。岡本さんは、「芸術の見方が変わった」と話され、鑑賞体験そのものの深まりを感じました。今回、盲ろう者の検討委員が特に良かったと評価したのは、様々な人たちと交流できたことでした。

これまでの芸術鑑賞の取り組みは、作品につ

いて盲ろう者にいかにわかりやすく伝えるかという観点から、もしくは盲ろう者と見えて聞ける状態の参加者が感想を共有するところから始めていました。それは、見える者が視覚的な情報や印象を伝え、盲ろう者はそれを当てようとするという鑑賞に陥りやすい側面を持っていました。しかし、今回は盲ろう者が選んだ作品を、学生や一般参加者がまず見えない状態でさわって、盲ろう者と一緒に想像しながら対話することでイメージを膨らませる、いわゆる“正解”に拘らない鑑賞になったと言えます。「交流する中で新たな作品が作られていくようだった」という事務局員の野中さんの感想からもそのことが伺えます。

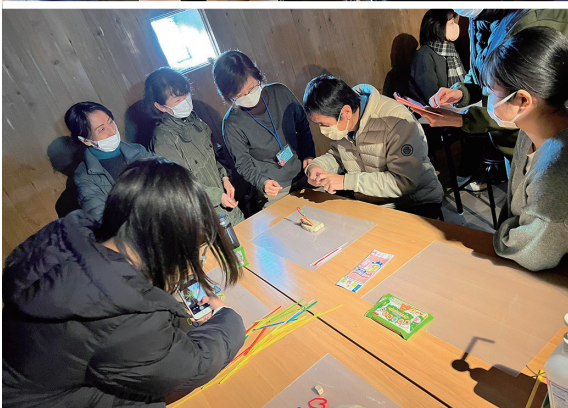
また、学生や一般参加者に盲ろうについて知ってもらう機会にもなりました。緒方さんは、「盲ろう者がどのようにコミュニケーションを取り、芸術を楽しんでいるのかを知ることができ、勉強になった」、山本さんは、「盲ろう者と一緒に芸術を楽しむことについて考えるきっかけになった」と述べられました。盲ろう者の講師と実際に出会い、一緒に作品を鑑賞したワークショップの一般参加者からは、「楽しく鑑賞できた」という回答が寄せられ、盲ろう者と関わるきっかけとしてワークショップは良い体験となったと考えられます。

盲ろう者が芸術鑑賞を楽しめる状況自体、アクセシビリティの拡充に欠かせません。加えて、学生や一般参加者が盲ろう者と出会い、盲ろうへの気づきが生まれることは重要な効用です。盲ろう者が必要とするサポートについて知ることにとどまらず、芸術鑑賞を通して盲ろう者の知覚世界に触れ、感じ方を共有する

ことで、互いの鑑賞体験が豊かになるという相互作用があることを感じます。双方向のコミュニケーションが生まれる交流は、盲ろう者との芸術鑑賞をより充実したものにし、さらには関わる人たちにより、地域が、誰もが楽しく暮らしやすい場所へと変化していくことが示されました。

今後の課題としては、今回、事業に関わる盲ろう者が少なかったことが事務局員の萩原さんから指摘され、より多くの盲ろう者が参加できる機会の創出が求められます。また、芸術鑑賞の深まりを感じた一方で、この試みはまだ途上にあり、機会を増やすだけでなく、その体験の質

に着目し、盲ろう者が本当の意味で文化芸術活動を楽しむことができるように、アクセシビリティの向上に取り組んでいきたいと思います。



第3章

コーヒーを楽しむ ワークショップ

(1) 目的

前章で確認した通り、盲ろうは、目(視覚)と耳(聴覚)の両方に障害があることを言います。盲ろう者は、情報を得たり、人と会話したり、外出することに困難さがあるため、社会から孤立してしまうこともあります。

その一方で、食は、多くの盲ろう者にとって親しみのあるものです。食べること、料理することは、味覚や触覚でも楽しめます。この実践では、盲ろう者が社会とつながり、いろいろな活動に参加しやすくなるように、食を通したワークショップを企画しました。そこには、2つの目的があります。

1つは、盲ろう者が主体的に参加できる活動が地域に増えることです。地域にある様々な楽しみに出会い、参加できる機会が増えることで、選択肢の幅が広がり、充実した社会参加につながると考えます。

もう1つは、盲ろう者の活動の幅を広げる地域住民が増えることです。地域の人が盲ろう者に出会い、必要なサポートやちょっとした工夫、また、いつも通りの振る舞いで良いこと等に意識が向けられ、相互理解が深まることを目指しました。



ワークショップの様子

(2)実施概要

日 時:2月19日(月) 13:30~15:00

会 場:おうみ作業所 きみいろ

Den-en Kitchen (近江八幡市)

参加費:500円(食材費)

講 師:Hedgehog珈琲 橋三枝子氏

参加人数:10人(盲ろう者2人、通訳介助者等8人)

協 力:NPO 法人しが盲ろう者友の会

コーヒーのハンドドリップ体験ができるワークショップを実施しました。まずはコーヒー豆をさわり、香りを確かめた後、その場で講師に豆を挽いていただき、参加者がそれぞれコーヒーをドリップし、お菓子と一緒にいただきました。2種類のコーヒーを2回に分けて淹れて、香りや味の違いを楽しみました。

講師に、地域のカフェ「Hedgehog珈琲」店

主の橋三枝子さんをお招きしました。参加者は、しが盲ろう者友の会から盲ろう者2名、通訳介助者や支援者他8名でした。また、会場となったきみいろのスタッフの方にも同席していただきました。

(3)ワークショップの流れ

事前打ち合わせ・活動見学

しが盲ろう者友の会との打ち合わせでは、参加者への必要なサポートや当日の流れの確認を行いました。講師との打ち合わせでは、準備していただく器具や豆について検討しました。その後、講師とともに、しが盲ろう者友の会の活動を見学に行き、当日の内容や必要なサポート

について意見交換を行いました。当日は盲ろう者2名が活動されていたため、「日常生活でコーヒーをどれくらい飲んでいますか」「インスタントコーヒーにお湯を注ぐときはどうやって量を確認していますか」といった質問をする場面も見られました。

ワークショップの内容を考える中で支援者からは、「豆の種類について説明してほしい」という意見があり、豆の香りや味の特徴などを説明していただく時間を設けることにしました。こういった意見を踏まえて講師からは、1杯目は講師のおすすめを飲んでいただき、2杯目は2種類の豆の中から選んでもらうというのはいかがでしょうかといった提案がありました。また、器具についても、盲ろう者が安全に楽しむことができるよう、通常、ハンドドリッパーではお湯を円を描くように淹れる方法がメジャーですが、一点に注ぐだけで美味しいコーヒーができるドリッパーを準備していただくことになりました。

ワークショップ

①状況説明・自己紹介

ワークショップを始める前に、盲ろう者に周囲の情報を伝えるため、会場の状況説明と全員の自己紹介をしました。また、参加者には5つのペアに分かれていただき、ワークショップはペアで進めました。

②器具等の確認

用意されたカップやドリッパーをさわって確認しました。コーヒーと一緒にいただく、缶の入れ物に入ったお菓子も配られ、参加者は楽しそうに中身を確認している様子でした。

【1杯目】

③豆をさわる・香りを感じる

まずはコーヒーの豆をさわって、香りや触感を



味わいました。その後、講師に豆を挽いていただきました。

④コーヒーを淹れる

今回使用したドリッパーは通常のものより長細く、お湯を回し入れるのではなく、中心に注ぎ続けるタイプのものでした。講師やスタッフがペーパーフィルターをセットし、コーヒーの粉を入れ、参加者は、ドリップポットに用意されたお湯をゆっくり注ぎ、コーヒーを抽出しました。

⑤コーヒーとお菓子をいただく

淹れ終わると、お待ちかねのコーヒータイムです。お菓子と一緒にいただき、コーヒーの味や風味を楽しみました。

【2杯目】

⑥コーヒー豆を選ぶ

2杯目は、参加者が2種類の豆の中から好きなものを選びました。講師の説明を聞き、豆の香りや苦みが強いかな等の情報をもとに選んだ豆を講師に挽いていただきました。

④～⑤を繰り返す

1杯目と同じようにコーヒーを抽出し、最初に飲んだコーヒーとの味や香りの違いも楽しみながらいただきました。

最後は、家でも簡単にコーヒーを飲めるように、ティーバッグ型のコーヒーバッグをそれぞれ持ち帰っていただき、終了しました。また、参加者へのアンケートを実施しました。



(4) アンケート結果

参加者の声

- 初めての体験ができてとても楽しかった。
(盲ろう者)
- カフェオレ、ウィンナーコーヒー、ミルクティー
(ホット、アイス)好きです。(盲ろう者)
- とてもいい機会となりました。ありがとうございました。(通訳介助者)
- またコーヒーの体験してほしい。(通訳介助者)
- 最初に淹れ方を一度説明してもらう方が良かったかと思います。(支援者)

アンケート結果 回答者:9人

質問1:ワークショップに参加した理由を教えてください。(複数回答有)

【選択肢】	【回答者数】
コーヒーが好き.....	8
その他 グロー企画による/担当者として.....	3
興味があった.....	1
参加しやすい.....	1

質問2:ワークショップで良かったことはありますか?(複数回答有)

【選択肢】	【回答者数】
美味しかった.....	7
新しい体験ができた.....	4
ハンドドリップができた.....	3
講師の先生と出会えた.....	1
その他 入れ方の注意点が聞けた.....	1

質問3:またコーヒーを淹れるワークショップをしてみたいですか?

はい 7人 いいえ 1人 どちらともいえない 1人

質問4:講師の先生の店に行ってみたいと思いますか?

はい 7人 いいえ 2人

(5) 考察

今回のワークショップでは、地域のカフェと連携し、盲ろう者や支援者とともにコーヒーのハンドドリップ体験を行いました。事前打ち合わせで支援者と話し合い、ワークショップでは普段できないような体験をしたいというニーズがあることがわかりました。参加者の感想からもそのことがわかりました。「ワークショップで良かったこと」について、最も多かった回答は「美味しかった」、次いで「新しい体験ができた」「ハンドドリップができた」でした。盲ろう者からは、「初めての体験ができて楽しかった」という声が聞かれ、「コーヒーを楽しむ」というワークショップの内容を達成できたと考えられることに加え、新しい体験ができる機会があることの重要性を感じる結果となりました。一般的には当たり前に行われていることでも、当事者にとっては大きな発見であり、新しい体験だということに気づかされます。このような取り組みを、盲ろう者や様々な地域住民と一緒に実践していくことが大切であると感じました。また、今回は盲ろう者だけでなく、通訳介助者や支援者も同じ立場で参加し、ワークショップを楽しめたことも1つの成果であると言えます。「食」は、支援する側、される側という立場を超えて1人の地域住民として、盲ろう者も支援者も誰もが楽しめるものであり、相互理解を深めるきっかけとなり得ることを再認識させられました。

ワークショップの内容を検討するにあたり、しが盲ろう者友の会の生活訓練の活動を講師とともに見学し、盲ろう者の日常生活について盲ろう者や支援者に質問しました。具体的には、盲ろう者が普段お湯を注ぐ際、どこまで注げば良いか指をお湯に近づけたりカップを持ったり

して温度で確かめていること等を教えていただきました。それらの情報から、盲ろう者と一緒にコーヒーを楽しむ方法について、様々な工夫を考えていただきました。ドリッパーの大きさを見て確認できない場合、安全にお湯を回し入れることは難しいため、一点にお湯を注ぎ続けるタイプのドリッパーを使用することや、盲ろう者が家でも簡単に美味しいコーヒーを飲めるようにティーバッグ型のコーヒーバッグを使うこと等を提案していただきました。このようなアイデアが地域のカフェから生まれたことは意義深く、地域における盲ろうへの理解が深まり、盲ろう者が活動を楽しめる機会が増えることにつながると考えます。

ワークショップの会場となったカフェは、生活介護事業所に併設された、通常は地域に開かれているカフェです。キッチンカーや外部のお店がスペースを利用し、マルシェやイベント等も開催しています。会場としても地域とのつながりを大切にしており、今回、しが盲ろう者友の会や近隣のカフェとも連携して新たな関係を作ることができました。当日は会場のスタッフに同席していただき、盲ろう者がどのようにコミュニケーションを取り、コーヒーを楽しんでいるかということを知っていただく機会にもなりました。盲ろうへの理解があるカフェが地域に増えることで、盲ろう者が楽しめる活動の選択肢も増えると言えます。

この実践を通して、コーヒーを楽しむことをきっかけに地域のカフェが盲ろう者と交流し、ワークショップを組み立てる過程で盲ろう者の生活ニーズを探り、一緒に活動を楽しむための工夫が生まれました。食を楽しむことは、それ

自体誰もが選択できることが重要であると同時に、受け止める地域の土壌を耕す効用を持つことも示してくれています。今後は、地域のお店だけでなく他の地域住民も参加し、盲ろう者とともに食を楽しむ取り組みを実施し、交流の機会を広げることで、アクセシビリティの向上につなげていきたいと思います。



ウェブサイト「SHIGA-FUKU」 について

(1)ウェブサイト 「SHIGA-FUKU」の運営

滋賀県の障害福祉を牽引した糸賀一雄氏の思想の普及・啓発に取り組み、滋賀の福祉の魅力を発信することで、障害福祉のさらなる発展につなげることを目的とします。特に若い世代の福祉職員や福祉分野以外から転職した職員を対象に、共通して持つ課題の1つである「目の前の支援に追われ、他の実践を知る機会が少ない」ということに対応し、糸賀思想が通底している実践が多くあることを身近に知る機会を創出することを目指しました。

①実践者インタビュー

障害福祉分野をはじめ、様々な社会問題の中で困難な状況に置かれている人を支援している、また福祉の思想を地域の中で生かしながら活動している滋賀県内の実践者のインタビュー記事を発信しました。

②イベント情報の収集・掲載

障害当事者等様々な人が参加できる滋賀県内

で開催される福祉に関するイベント、研修会等の情報を発信しました。

③県内福祉事業所一覧の情報の更新

障害福祉サービス事業所等一覧の情報を更新しました。

(2)トークイベントの開催

滋賀で福祉または福祉的な実践をしている実践者と交流できる機会を創出することを目的に、過去のインタビューを講師に招き、「シガフクカレッジ」を開催しました。

開催概要 時期:10月～11月
回数:全4回

ウェブサイト「SHIGA-FUKU」は
こちらからアクセスできます。
<https://careservice-shiga.com/>



インタビュー

中田美穂さん

陶芸家として活動しながら、福祉施設や養護学校で陶芸を中心とした芸術活動をされている中田美穂さん。

福祉施設で活動するようになったきっかけや、活動の中で大切にしていること、福祉施設以外での活動についてもお聞きました。

(2022年12月15日 陶中田美穂アトリエにて)



初めから陶芸家になろうと決めていたわけではありませんでした

——陶芸を始められたきっかけは？

美術大学では版画科に通っていました。絵を描く中で流行の変化を読み取って考えることも多くて、それより純粹にもものづくりをする方が向いているなと思っていた時、友人に誘われて行った沖縄旅行で陶芸に出会いました。「旅の記念に」と誘われてやってみたら上手にできました。すごく集中してできるし、難しいことを考えずにもものづくりができる、その楽しさを知ってこれはいいなと思ったことが始まりです。

旅行から帰ってきて、版画科の先生に陶芸科の先生を紹介してもらってからは版画科に在籍しながら、陶芸科の教室にも行って授業に参加させてもらったりしていました。

就職活動の際に信楽で就職先を探して、信楽の窯業試験場に通いながら、製陶所でのアルバイトを始めて、社員になって3年ぐらい勤めたの

かな。その後は自分の窯を持って活動してきました。そんな流れで何となく今までやってきていますね。別に初めから陶芸家になろうとか、特別陶芸が好きという訳ではありませんでした。

——どのような経緯で福祉施設での陶芸活動を始められたんですか？

陶芸の講師として活動するようになったのは10年ぐらい前からです。知人から滋賀県立陶芸の森が県内の小中学校で行っている出前授業の講師が足りないからと声をかけられて、講師登録をしたことが始まりです。また、最初に障害のある方と関わる機会をいただいたのはNPO法人子育て研究会です。そこで障害のある方の陶芸教室を行い、慣れ親しみました。その後、救護施設ひのたに園の職員さんに声をかけられました。声をかけられたときは「なぜ私が」と思いましたが、せっかくお声がけいただいたので一度やってみるかと思い、ひのたに園での陶芸活動アトリエ・セラミカの講師を引き受けました。

何年か前に同じ町内にある障害者施設で月に

1回のアート活動のお手伝いをしていましたが、当時はお手伝いという感じで、本格的に施設で芸術活動に関わったのは、ひのたに園が初めてです。その後、社会福祉法人虹の会や八日市養護学校から声をかけていただいて、そちらでも陶芸活動をしています。



中田さんのアトリエと作品

私の役割は安心して来られる場所づくり

——福祉施設等で陶芸活動をするにあたって、大切にされていることはありますか？

みなさん一人ひとり、自分の思いを持っていると思っています。私が口を出して作らせるのではなく、「ちょっとこうしてみたい」と希望があれば準備やお手伝いするくらいです。

芸術は強制されてするものではないから。基本は楽しい、学びたいという気持ちですね。自分は好きで選んで芸術家をやっているのに、人に何か強制するのはおかしいと思うんです。だから、「陶芸をやりたいと思ったらやってください。やりたくなかったら自由に過ごしてください」ぐらいの感じで活動しています。

活動の中で「こうせなあかん」と言ってしまうたら、もう来てくれないかなと、その恐怖感も

ありますね。「もう嫌や」と言われたら敵わないというか、楽しく来てもらえる場所づくりは意識していますね。

特にひのたに園での活動は、「もっと仕事になった方がいいのかな」「活動に参加する人が自立できる手伝いもした方がいいのかな」と、いろいろ考えましたが、活動を通して交流を重ねていくにつれてそれは私の考えることではないなと思うようになりました。私のここでの役割は安心して来られる場所づくりで、何か作ろうかなと思える雰囲気づくり。やりたいと思うことや好きという気持ちが原動力になると思うので、そこを邪魔しないということをやはり1番に思っておかないといけないなと思っています。



ひのたに園での陶芸活動 アトリエ・セラミカの様子

まったくわからない状況から始まった施設での陶芸活動

——ひのたに園で活動を始めた当初は思い悩むこともあったそうですね。

どうしていいか、まったくわからないという感じでした。私は何もせず、道具を用意して、場所を提供したら、みなさん作りあげてくれるんじゃないかと。手探り状態で普段開催している陶芸教室の要領で手びねりやたたらの説明

をしました。活動初期は参加者が形を作って乾燥させた作品に私が釉薬などを掛けて、焼いていたんですよ。すると制作中とはとても素敵な造形だったのに、焼きあがった作品は魅力が減ってしまうように感じました。何が問題だろうと考えたんです。私が本人さんの考えや持っているものを潰している感じがしました。私の考えた釉薬だから、私の造形に合う釉薬で、利用者さんたちの造形に合う釉薬や焼き、仕上がりになっていないなど。たまたま相談した材料屋で筆で塗れる釉薬を教えていただいて、釉薬付けまで本人さんにしてもらった今の活動の形になりました。

本来、釉薬を付けるとなるとパケツを用意して、作品を浸けてと作業的には難しいものなのですが、筆で塗れる釉薬なら、椅子に座って、好きな色を選んで、絵の具みたいな感じで塗れるからできるのではないかと。それを試してみたら雰囲気ガラッと変わって「これや」という感じでした。

折れてもいい、痛そうでもいい、そこがこの作品の肝になる

——活動をするにあたって気を付けていることはありますか？

活動をしていると、誘導になりがちなところもあるので、どうしようと思うときはありますね。救護施設や障害者施設、養護学校での活動では障害等の事情があって自分で情報を取ってくるということが難しい方が多い。私がコーディネーター的な役割で、持っている情報を提供して、本人さんに選択してもらえたらなと思っています。でも、それが誘導になるのか、アドバイスになるのかという、微妙なところではあり

ますね。情報をどこまで何を提供するか、どうしたら誘導ではなくアドバイスになるかということは常々考えています。

どうしても陶芸だと「ここが折れそうだから、直そう」「ここ痛そうだから、ちょっと押さえて直そう」と、手直しをしがちですが、それでは自由な作品作りでなくなってしまう気がしました。どう助言していいものか悩んでいた時に、視覚障害のある方の芸術活動を支援されている方から「芸術と工芸は違いますよ」と助言をいただきました。そのときに、折れてもいい、痛そうでもいいんだと、そこがきっとこの作品の肝になる、と。そこからは折れそうだから、痛そうだからといった理由で直すことはやめておこうと思うようになりました。

そんな中でもまた変化があって、去年の2月にアトリエ・セラミカの活動の一環でギャラリーを借りて作品の販売会も兼ねた展覧会を開催したのです。展覧会を開催するにあたってお客さんが手に取った時に痛そうな部分がある作品や、壊れやすく売りづらい作品には、売れるように調整する意味も込めて少し助言しました。



ひのたに園 動-Dou-展(2022.2月)看板

以降は売る場合や使う時を想定して「ここが欠けそう、痛そうやから、ちょっと押さえときませんか」と活動の中でお伝えするようになりました。そこで本人さんが納得して直されることもありますし、「いや、ここはこのままで」と言われたらそのままにしています。



つちっこでの野焼きの様子

教育と福祉と芸術を繋いでいきたい

——今後の展望について教えてください。

私はいったいどこに向かっているのだろうという感じですよ(笑)。

美術や芸術の敷居を下げたいという意識はずっとあります。右肩上がりの経済成長をしてきた日本の中で芸術はすごく崇高なものになってしまったので、もう少し敷居を下げたいです。

ひのたに園の活動でも、これからはご近所とか一般の方の陶芸教室と一緒にできれば面白いですよね。もっと社会との関わりを増やしていくきっかけを作りたいです。

他にも竜王町にあるひだまり学舎というところで、月に1回「つちっこ」という子どもたちの居場所づくりの活動をしています。県内で出前

授業をしていた中で、教室に入れないう子や、不登校の子がいる現状を目の当たりにして、この状況に疑問を感じていたんです。そんな時に竜王町教育委員会のスクールソーシャルワーカーの方と出会って、「自分たちでやってみるか」と去年から始めました。そこでの陶芸活動では、ひだまり学舎の庭に穴を掘って粘土を取って、作って、2~3か月後にそれを野焼きで焼くという方法を取りました。それが結構楽しいです。「みんな土を掘っているから、土を掘らなあかん」というわけではなく、「帰りたい、帰ろう」となってもいいんですよ。遊びの中で何か学びがあったらいいかなと思っています。

ただ、学校に行きにくい子は集団が苦手なこともあるので、たくさん人を集められない。ここが矛盾するところで、いっぱい人を集めて、参加費で運営するというのは難しい。

いろいろ問題が山積みですけど、それを続けていくことで教育と福祉と芸術を上手に繋いでいけたらと思っています。繋げて社会に還元し、応援してもらえるようにこのまま続けていけたら、ありがたいですね。

それとは別に、自分の作家活動もやはりきちんとしていかなないとね。「あの人、誰?何?」と言われたら元も子もないので、やはりアーティストとしてもちゃんとしていかなないと。だから、体が幾つあっても足りないです(笑)。

中田美穂(なかた・みほ)

陶芸家。美術短大の版画科修了後、滋賀県窯業技術試験場デザイン科、小物ろくろ科修了。信楽の製陶所に勤務した後、27歳で独立、窯を持つ。1998年から韓国へ陶芸の旅に行き、そこで出会った仲間と今も交流を持ち続ける。年間2~3回の展覧会や、受注製作をしながら、あちこちで講師業をする日々。

インタビュー

富田賢二さん

大津市内にあるNPO法人IL逢坂福祉会で理事長をされている富田賢二さん。

滋賀県で働くきっかけや、法人を立ち上げたときの思い、そして今後の展望についてお聞きしました。

(2024年1月19日 IL逢坂福祉会 生活介護事業所IL Gardenにて)



「このままでええんか、福祉とかいいんちゃうか？」

——福祉業界で働くようになったきっかけを教えてください。

生まれは大阪ですが、滋賀県に小学生低学年のときに父親の仕事の都合で引っ越してきました。実は大津育ちなんです。高校を卒業してからはパチプロになりたくて東京で1年間パチスロ生活をしていました。その後、19歳で滋賀県

に戻ってきて工場に勤めましたが、医療従事者の父親に「このままでええんか、福祉とかいいんちゃうか？」と言われて、25歳のときに大阪の専門学校に入ったのが福祉の道に進んだきっかけです。

——専門学校卒業後はどうされていたんですか？

通っていた専門学校で障害福祉論を教えていた恩師の先生が障害者のグループホームの施設長をされていたので、そこでアルバイトをしていました。恩師の先生には「障害福祉分野で働いたらどうか」と言ってもらったのですが、進路担当の先生に「将来の事を考えて、高齢分野に進め」と言われたこともあり、卒業後は大阪の特別養護老人ホームで修行をしようと思って勤めました。でも「なんか違うなあ」と思っていて、そんなジレンマや色々なプレッシャーから「鬱病、社会不安障害、パニック障害」を発症し、1年半ぐらい引きこもっていました。そんな時に恩師の先生が「リハビリがてら、週1回でもいいから」とご自身の転職先の施設に誘っ



駐車場に設置された木のぬくもりを感じるIL逢坂福祉会の看板

てくれました。そこは成人の障害者の入所施設で、生活支援員として最初は2～3時間から始めて、だんだん8時間働けるようになり、週1回から2回、3回と増やして行って、半年ぐらいそんな働き方をさせてもらって正規職員になりました。

— 滋賀県で働こうと思ったのはなぜですか？

妹が末期がんになり、看取りで滋賀県の病院に入院していたとき、妹が当時働いていた大津のNPO法人の代表に会いたいというので、病室まで来ていただき妹と話してもらうことができました。それがきっかけで、代表から「富田くん、もう滋賀に帰っておいで」「やりたいことがあるなら協力する、独立せえへんか」と熱心に声をかけてもらっていました。その頃、働いていた法人で色々あって退職することになり、次の就職先は運送会社に決まっていたのですが、入職寸前で「やっぱり福祉がしたいな」と思い始め、代表に相談の電話をしたら「来月からでもいいから、こっちに帰っておいで」と言ってもらいました。その時に「もう帰ろう、大阪にいる意味はない」と思い、自分の生まれた場所ではない

ですが「自分が育った大津で何かできたら」と滋賀県に帰ってきて、その代表がいるNPO法人に勤めることになりました。

「うちの子、行き場所ないんやわ」

— IL逢坂福祉会を立ち上げるまでについて教えてください。

働くことになったNPO法人は大津の中でも重度の方を受け入れているところでした。保護者の方と話す中で「卒業後が心配やねん」「うちの子、行き場所ないんやわ」という話を聞いて「これは作らなあかん」と思いました。また、当時の大津市長が「生活介護事業所が足りない」というテーマでシンポジウムをされていて、それぐらい足りていないということも知りました。すべてをカバーすることはできませんが、自分の知っている人や、その家族のために生活介護事業所を作ろうと思ったのが立ち上げるきっかけです。そして、法人の名前は専門学校の時にお世話になった恩師の先生が、アメリカで起きたIL運動について「当事者が発信したことで世界が動き出した。そこに福祉の根源が詰まっている」という話を聞いて、その考え方にすごく感銘を受けて「IL」という名前は絶対に使おうと思っていました。法人を立ち上げた当初は逢坂福祉会という名前にしていたんですが、やっぱり「IL」を入れたいなと思ってIL逢坂福祉会という名前になりました。

— 建物がログハウスで雰囲気がとても素敵ですが、ここを選んだ理由はありますか？

いっぱい物件を見ていたのですが、どれもなんか違うと思っていたんです。「うちの子、行き場所ないんやわ」と話していた保護者の方とも一緒に物件を探したりしていました。そんな中、この物件が売りに出された瞬間に保護者の方から連絡を頂き、「こ



ログハウス内には利用者と職員の皆さんが作った作品が飾られている

こだ！」と感じてすぐに電話をしました。そして、内見に行き「もう買います」と言って決まりました。そこからは「あの子が利用できるように」と1人の子を思い浮かべながら1年かけて、車椅子が使えるようにスロープを付けたり、トイレも手狭だったので壁を抜いて新しく身体障害者対応のトイレを増設しました。開所する時は利用者が集まらなくても、それこそ思い浮かべていた1人の子だけでも別にいいやと思っていたぐらいなのですが、いざ蓋を開けてみたら5人の方が来てくださったんです。それからは近くの養護学校に通っている重度の知的障害のある人はここを進路先を選んでくださっています。重度の知的障害のある人の行き場所の1つとして、ここは存在意義があるのかなと思っています。



車いすの利用者が建物に入れるよう
付けられたスロープ

不自然でも良いから 「仕事をしている」という形を 大事にしたい

——IL Gardenの活動内容を
教えてください。

開所当初から給与をお支払いしています。午前

中は作業してもらっていて、作業内容としては重度の方なので空き缶つぶしやシュレッダーをかけるといったものです。空き缶は保護者の方が持ってきてくれたり、シュレッダー作業は付き合いのある会社さんから仕事をいただいています。ご厚意で他に紙折りのような作業をいただくこともあります。前は清掃業もやっていたのですが、なかなか難しいので今はストップしています。

——利用者の方が過ごされている中で、こだわっていることや大切にされていることはありますか？

生活介護事業は利用者に給料を渡さなくても良いのですが、僕としては「お世話をしてもらうだけ」のような場所はちょっと違うかなと思っています。不自然でも良いので「仕事をしに行っている」ということにしたくて、1日30円ですが給料をお支払いしています。ここを利用している人の大半は、お給料が入った封筒をもらうときに「給料」という感覚を理解することが難しい方が多いですが、「給料日」というものは嬉しいと感じてくれるのではと思っています。中には軽度の人もいて、その人は月500円ぐらいの給料になるのですが、その給料を貯めて1年に1本ゲームソフトを買っています。家に帰ったら「仕事、頑張ってきたか？」と声をかけられ、「頑張ってきたよ」と言っているそうで、モチベーションを持ってきている方もいます。ご本人だけでなく家族の方に向けても「お世話をしてもらうためだけに来ているんじゃないんですよ。お金を稼ぐために来ているんですよ」という意味も込めてやっています。ちなみに今年度から施設の裏で畑をしています。その水やりしているところを写真で撮って保護者の方にお見せしています。採れた野菜は保護者の方にお渡ししていて、結構喜んでもらっています。



富田さんと利用者のみなさん

普通に生きる、あたり前に居られる場所

——IL 逢坂福祉会のホームページには「普通に生きる」「あたり前に居られる場所」と書かれていますが、そこにはどんな思いが込められていますか？

僕は施設や施設従業者はエンターテイナーじゃなくてもいい、特別を提供しなくてもいいと思っています。テーマパークに行ったら、スタッフが非日常を演出していますよね。病院も非日常だと思うのですが、そういうところとは対照のところにしたいと思っています。特別なことをするわけでもなく、「普通に来て、普通に帰る」といったような何気ない毎日をちゃんと作っていくこと、それは意識しないと難しいことだと思います。「今日は別にいいことがあった」「悲しいことがなかった」「嫌な気がしなかった」とか何気ない普通を良しとする。そんな「普通」が100点なんだという感覚が大事だと思っています。「普通」は真ん中ぐらいに思われていると思いますが、僕の中では結構上なんです。何も無い日が本当にすごく大事なと思います。

——その人が望む「普通の暮らし」「何でもない日」が難しい場面もありますよね。

ここを利用していた方が入所施設に行くことに

なり、相談員さんと行き先を探し回ったことがありました。県内の受け入れ先を見つけるのがなかなか難しく、遠い県外の施設に行くことになりました。私は保護者の方と一緒に施設まで送りに行きましたが、「こんな悲しい現実があって良いのだろうか、こんな現実をなんとかしたい」という思いになったのを覚えています。このことがきっかけになって施設のすぐ近くにグループホーム用の土地を買いました。施設を利用されている方が県外に出なくていいように、また、滋賀県から県外に行くしかなかった人たちを少しずつでも滋賀県に戻って来られるようにしたいと考えています。

——今後の展望を教えてください。

僕の役割としては、近くで保護者の方が会いたいと思ったらすぐに会える環境を作ること、みんなが普通に生きられるような環境を作ることだと思っています。それは自分のやりたいことでもあり、使命かなと思っています。そして大津市民として小さい頃から育ったこともあって、やっぱり大津に貢献したいなと思っています。今、このIL 逢坂福祉会を利用している人たちがこの地域に住んでこの地域で一生を終えるために「普通」をずっと続ける。僕はそのための歯車の1つであり、それで十分だと思っています。

富田賢二(とみた・けんじ)

NPO法人IL 逢坂福祉会 理事長

特別養護老人ホーム、障害者入所施設、障害児支援などの経験を経て、利用者も職員も「あたりまえに居られる場所」という理念のもと、大津市でNPO法人IL 逢坂福祉会を立ち上げる。現在は「その人らしい普通の生活」を大切に、生活介護事業所「IL Garden」を運営している。

「シガフクカレッジ」レポート

●開催趣旨とコンセプト

▶趣旨

福祉現場で働く人、また福祉に関心を持つ人が、滋賀県内で、様々なフィールドで福祉実践を行っている人の存在やその取り組みを知り、「福祉実践者」としての自覚とモチベーションを再発見するとともに、同志とのネットワークの起点となる出会いを創出する。

▶コンセプト

一方的な講義形式ではなく、双方向のコミュニケーション
 コーヒー片手に広場に集まるような、リラックスした雰囲気



●全4回の開催概要

- 第1回 10月26日(木)19:00~20:00
「私と陶芸と福祉と。」
中田美穂(陶中田美穂)
- 第2回 11月10日(金)19:00~20:00
「障害のある人と社会の懸け橋になる」
楠田貴之(社会福祉法人さつき会 さつき作業所)
- 第3回 11月24日(金)19:00~20:00
「精神障害のある人に寄り添って
～みんな笑顔で楽しく仕事をする～」
松宮貴義
(一般社団法人水口病院 地域生活支援センターしroyama)
- 第4回 11月30日(木)19:00~20:30
最終回クロストーク企画
「子ども・若者たちが本当に欲しいものってなあに？」
佐藤すみれ(NPO法人やんちゃ寺 代表)
林真帆(社会福祉法人小鳩会 小鳩乳児院)

●各回の流れ

- <第1～3回>
19:00-19:10 インタロダクション
19:10-19:40 講師によるトーク&インタビュー
(聞き手:SHIGA-FUKU運営メンバー)
19:40-19:55 参加者からのコメント・質問・意見交換
19:55-20:00 クロージング
- <第4回(最終回)>
19:00-19:10 インタロダクション
19:10-20:10 講師によるトーク&インタビュー
(聞き手:SHIGA-FUKU運営メンバー)
20:10-20:25 参加者からのコメント・質問・意見交換
20:25-20:30 クロージング

▶参加方法:オンライン

▶参加費:無料

●最終回クロストーク企画レポート

11/30(木) 19:00~20:30 シガフクカレッジ第4回

最終回クロストーク企画「子ども・若者たちが本当に欲しいものってなあに？」

心理職として活躍されているお二人に今を生きる子どもたちとどんな思いで向き合っているのか、たっぷり1時間お聞きしました。その対談の一部をレポートにて紹介します。

佐藤すみれ(NPO法人やんちゃ寺 代表)

林真帆(社会福祉法人小鳩会 小鳩乳児院)

聞き手:山邊まみ(社会福祉法人グロー地域共生部)

「ありのまま」を受け止める ということ

山邊 佐藤さんと林さんとお互いの取り組みについて、それぞれ感じたことがあればシェアしてください。

佐藤 子どもたちに必要なものというのは年齢で変わらないんだなと感じました。きちんと受け止めてもらって、大事にされる体験が前提であって初めて他者を大事にしたり、与えることができるという順番だということを私たちは忘れがちです。悪いことをする子や自分を傷つける子に「それをしたらだめ」と言ってしまう。それは結局もっと大事にされてない体験を加えてしまっているわけですね。そういった行動をしてしまうその子を受け止めるっていう理解を周りが持っているかっていうのはすごく大きいですね。

林 例えば手が出てしまう子がいたとして、その子に対して「だめ」と否定するのではなく「どうしてそういう行動に出てしまうのか」を話し

たり、振り返る時間を作るようにしています。大人とのやりとりの中で大事にされる経験や寄り添ってもらった経験というのが大事だと思います。

佐藤 心理職として働いているとその視点を持って関わることはできるんですが、社会ではまだまだそうではない場面が多いと感じています。大人から見て、どうしてそんな悪循環になることをしてしまうのかと思っても、頭ごなしに「やめなさい」と伝えるんじゃなくて、何が欲しくてその行動をしているのか、良い方向に行くには本質的にどうしたら良いかを一緒に寄り添って考えるっていうのが大事ですね。

山邊 何をしていてもあなたはあなたなんだよ、大事な存在なんだよという意味で「否定しないことが大事」とのことですが、実際に子どもたちと関わっていて、「受け止めたいけど……」とジレンマを感じることはありますか？

佐藤 かなりあります。本当に日々自分の足りなさを感じていてその連続です。例えば売春のようなことをすることで、他人に大事にされていると感じ、自分の価値を見出している子がい



シガフクカレッジ第4回の様子

るとします。その子が欲しいものは誰かに求められる経験というのは理解できるんですが、その子を大事に思っているからこそ複雑な気持ちになります。でもそれはそのまま「私は〇〇のことをすごく大事に思っているから、心から応援できない自分がいる」と伝えます。

林 こんな風に言ってもらえたら、大人側も葛藤もあるけど、本気で向き合ってくれているんだと感じてくれるんじゃないかなと思います。

佐藤 その子を受け止めるというときに、「無条件に」というのが大事です。その子が何か良いことをしているから、大人の思う「良い子像」に当てはまっているからではなく、何をしても何かをしていなくてもあなたのことは大事に思っているというのがとにかく伝えられたらいいなと思います。

心理職として大切にしていること、これから

山邊 子どもたちを支援する上で「見立て」と

いうのが重要なキーワードかと思います。お二人はどんなことを大切にしていますか？

佐藤 本人の主訴が何なのかをブレずに捉えることが大事だと思います。「困りごと」が親の主訴になっていたり、学校の主訴になっていたりすることがよくあるので、見立てるときに本人は何に困っていて、どうなりたいのかという本人の主訴をきちんと捉えることが大事です。そうすると「この子の行動はこういう理由からかな」という予想が多少外れていたとしても、周りのサポートすべき内容が外れることは少ないと思います。そしてその予想、見立てを常に修正し続けるという感性を持つことも大事だと思います。

林 大人から見て「困ったな」という風に思う子は「その子が一番困っている」ということを頭に入れるようにしていて、その子自身がどう表現したらいいかわからなくてきつと困っているんだろうなと考えるようにしています。もちろん大人からの支援の中身を考えることも大事ですが、「どうしてこういう行動をするのか」を他の職員さんと一緒に考えることを大事にしています。子どもたちと関わっていると言葉は

コミュニケーションの一部でしかないと気づかされることが多く、しぐさや声の大きさ、ジェスチャーなど、いろいろな非言語的な発信もコミュニケーションの大事な要素で、そこも見逃さずにキャッチすることを意識するようにしています。

山邊 実際に関わる時には他の支援者とも連携が大切になってくるかと思うのですが、心理職としての立ち位置で心掛けていることはありますか？

佐藤 実際には、支援する人がその対象者さんに寄り添えるようにサポートすることを心掛けるかなと思います。決めつけや、あてはめを私が与えるのではなく、一緒に考えるような投げかけをしてみる。答えはないですが、支援する人が寄り添って理解しようというマインドになれるように寄り添うお手伝いをするのが大切だと思います。

林 本当にその通りで、私も心理職の言うことが必ずしも正しいわけではないという姿勢でいます。子どもたちの支援をメインでしている担当の職員さんが子どもたちをどう見るか、私も子どもたちと関わりながら一緒に考えていくことが大事だと思っています。

山邊 今後の展望はありますか？

佐藤 私が思い描くビジョンというのは、やんちゃ寺が大きくなること、やんちゃ寺が増えることではなく、選択肢が多様になることです。もっと子どもたちが行ける居場所とか出会える人間関係や体験が多様に準備されている社会になることが今後、作っていききたい展開であり、私

たちの使命かなと思っています。

林 心理職としても働き始めたばかりで悩みながらですが、自分や大人が関わることで、自分で自分を大切にできるような子どもたちが増えてくれたらいいなと思っています。特に関わっている子どもたちを見ていると、まずは誰かに自分を大切にしてもらおう経験がこの時期にどれだけあったかで全然違うんだろうと思うので、大人たちがどんな関わりを持てば、子どもたちが自分で自分を大切にできる人になれるんだろうかというのが今後、心理職として働く上でのテーマであり、大きな目標かなと思います。

登壇者紹介



佐藤すみれ (さとう・すみれ)
NPO 法人やんちゃ寺代表
臨床心理士・公認心理師・認定心理士。
行政職員や海外での勤務経験など様々なフィールドで活躍。現在は10代の子どもたち、特に「やんちゃ」といわれる子たちに寄り添い、共感することを大切に「ありのままを受け入れてもらえる場所」としてやんちゃ寺を運営。



林真帆 (はやし・まほ)
社会福祉法人小鳩会 小鳩乳児院
臨床心理士、公認心理師。
学生時代から子どもたちとの関わりを通して児童分野の心理職として働くことを目指す。小学生の時に滋賀県で暮らした経験から人とのつながりに魅力を感じ、滋賀県の小鳩乳児院に入職。現在、滋賀県ライフを楽しんでいる。

まとめ

私たちは「ちょっとそこまで、コーヒーを飲みに行こう」と思ったとき、馴染みのあるお店を思い浮かべたり、スマートフォンで「近くのカフェ」と調べて、さらに口コミや評価を見てお店を選んだり……。この「選ぶ」という行為に手間や抵抗を感じることは少ないのではないのでしょうか。しかし、障害のある人や生きづらさを抱える人が「ちょっとそこまでコーヒーを飲みに行こう」と思ったときはどうでしょうか。「支援者に相談をして、入れそうなお店を探して、日程調整をして、送迎の調整をして……」といくつもの行程をクリアする必要があります。「ちょっとそこまでコーヒーを飲みに行こう」の「ちょっとそこまで」が果てしない道のりに感じてしまう、「選ぶ」ことが難しい現状は決してアクセシビリティが高いとは言えません。

私たちが目指すアクセシビリティとは、やりたいことが抵抗なくスムーズにできることです。そのためには地域や地域住民が、生きづらさを抱える人たちとともに暮らしているという認識を持ち、理解していることが必要であり、私たちはこれまで様々な取り組みを通してその方法について研究し、模索してきました。

今年度の取り組みに参加した学生から『『盲ろうの人がいたらどうだろうか』と考えを巡らせる機会が増えた』といった感想がありました。それは、様々な人たちがお互いに「関わりあうこと」で、それぞれが自ら考え、アクセシビリティの視点を持つことができることを教えてくれるものでした。そして、取り組みを続けていくことが誰もが暮らしやすい社会につながることを改めて感じさせてくれたように思います。

これからも、今年度の取り組みから見えてきた「関わりあう」という視点を大切にしながら、どんな人も「ちょっとそこまで」が本当に「ちょっとそこまで」になる社会を目指して取り組みを続けていきます。

令和5年度滋賀県地域ケアサービス推進事業報告書
障害のある人の社会参加について考える
～文化芸術をきっかけに関わりあう～

2024年3月31日発行

制作・発行 社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
法人事務局地域共生部
〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦 4837 番地 2
TEL 0748-46-8100 FAX 0748-46-8228

発行責任者 牛谷正人
（社会福祉法人グロー（GLOW）理事長）

編集 山之内洋
（社会福祉法人グロー（GLOW）法人事務局地域共生部長）

執筆 石田瞳
（社会福祉法人グロー（GLOW）法人事務局地域共生部地域共生課）
山邊まみ
（社会福祉法人グロー（GLOW）法人事務局地域共生部地域共生課）

デザイン 高石巧

助成 令和5年度障害者地域生活移行促進事業（滋賀県）

